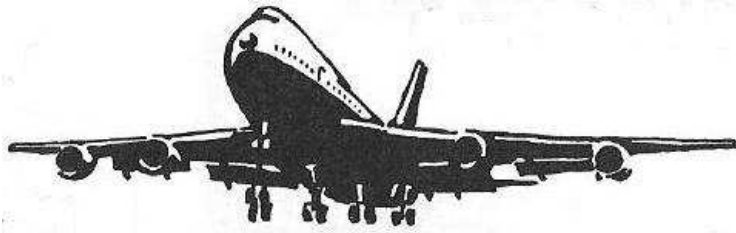

一部50円です

ハワイ珍道中 その2



出発の2月26日、私は旅先で起こるかもしれないトラブルを想像しながら、雪がちらつく道を、母とキミちゃん、そしてハルちゃんを迎えに行ったのである。婆さんたちは息子たちに頼んでなんとかパスポートを手に入れていたのでまずはひと安心をした。紛失してはいけない

いから、その場でパスポートを預かりみんなをつれて我が家へ帰る。

家ではトキコさんと義母が待っていて、みんながそろったところで昼飯にする。朝早くから作ったという寿司や赤飯、餅までが食卓に並ぶ。田舎の婆さん達はいつも通り大声でガヤガヤ言いながら食べる。

一息ついてから、家内に関西国際空港まで車で送ってもらい、初めての関空に着いた。私も婆さん達も厚着してきた服を脱ぎハワイ向けの薄着に着替える。

JALカウンターへ行って手続きをする際に、私は「80前後の婆さん達で足の悪いのもいるからトイレの近くの座席をお願いしたい」と付け加えた。すると、受付嬢は、いちばんトイレに近く横並びが2席だけの席表を示して「ここでもよろしければ三列お取りします」と説明してくれた。私は「その席でいいですから、お願いします」と言いながら、ジャンボ機のエコノミークラスにもいい席があるんだと初めて気が付いた。横に多く並んだ席の真ん中にでもなったら婆さんたちは困るに違いないと心配していたのだ。

搭乗する際にも便宜を受けた。多くの乗客が並んでいる後尾に並ぼうと歩いていくと、係員が来て「一番に搭乗してください」という。私は半信半疑に思いながら係員の言うままにみんなをつれていくと、待たずして機内へ案内されたのである。腰が曲がった母、杖をついて歩くのがやっとのハルちゃん、肥満で足が痛そうなトキコさん、野良着のままと思えるキミちゃん、はた目から見ればなんともおかしげな姿だったにちがいない。

しかし、私は経験したことがないドラマが始まったと直感した。いつのまにか婆さん達をつれていく不安が消え、思いがけない楽しみが待っている予感がしたのである。

女人結界

十年以上前になるが、初冬の十二月に奈良・大峰山の山上ヶ岳に登ったことがある。雲の動きがあわただしく、陽がわずかに射したと思うとすぐに陰るといふ、不安定な天候であった。登るにしたがって風が強くなり、稜線に達するころには雪が舞い始めていた。厚い雲が垂れこめ、遠くの山並みが霞む大峰山地は海のようにだった。一つ一つの山々が波頭のように見えた。

古来、修験者たちはこの海原を泳ぐように行に励んだ。ときに静寂な穏やかさを見せ、ときに憤怒の相をあらわにする山に宗教性を投じ、峰入りしたのである。山岳はマンダラであり、宗教的荘厳であった。

その中心である山上ヶ岳は現在も女人禁制である。登山口には「従是女人結界」という石柱が重々しく建てられ、女性を峻拒している。それが文化だ、伝統だというのが俺にはピンとこない。女性は山岳という道場を汚すのだろうか。なぜ女人結界なるものまでつくって、女性を排除しなければならぬのか。

深田久弥は百名山に大峰山を加えているが、「女人不許入」という石標があると記すのみで、それ以上言及しない。

インド生まれの仏教には女性差別があるが、結界をもうけて女性を差別、排除するのは日本だけであろう。(つづく) (猿)

「うちそうさま

「いらつしやい」「今日はお一人で」と声をかけられ、あたりを見廻してから、ドスンと。

我がでつかち（お尻）をすえる。

その気持ちよさ、幸いにして二三の顔、時間が充分にあり、ゆつくり考えようと思う間もなく

「何にしましょう」声をかけられ、あんかけうどん単品で、今日はサービスで、あれこれ

「単品で結構です」即座に返答する。ぼつぼつ本を出して目を通す。皮肉にも今日の持参したのは「おばあちゃん

の台所修行」阿部なお著。ちよつとやばいかな、こんな場所で、こんな本を読むなんて

中身は 手作りの味つけ ご飯をおいしくめしあがれ 心をこめたおそうざい

むだなし料理 その他 その中の一点に心を集中させているものだから自分の注文品が遅いの

に気づかず。 隣のテーブルの小父さん

「何注文しましたん。まだですか」といわれて気づいた。「ちよつと、あんた、私のどうなっ

てんの」

「なんでしたんかしら」

（えっ、こんな商売ってあるの）

「もういりません。出来ないようでしたら帰ります」

立ち上がりかけたなら、しばらくすると注文品、全く異なっているのが置かれた。

「こんなの注文してませんよ」

「すみません」早速運ばれてきたら、箸もつけられない状態。何よこれ。

あわててつくりましたと物語っている。でもいいか、いい具合にお腹もすいているし。

ふーふーと吹きとばして食べたけれど、美味しかったから、お腹の虫もおとなしくなったみたい。

「うちそうさまでした。」

ひとりじゃない

ようやく暮らしよくなってきた。誰とて待ちに待った季節といえよう。多くの人が体調不良で猛暑に耐えての毎日だ

ったがあちこちから紅葉見に誘われる。まだ、ちよつと早いよ。心の中から呼ぶ。

「行ってみたら」「身体は大丈夫か」

ふと浮かぶのは妹の声。 人生で大切なのは「上手にあそぶこと」と

「身体がついてゆくのなら面白いなあと思うことに当たってみるよ」と

現実はこの通りにならなくても、ポツポツやってみるか。

人と同じ土俵の上に立つこと夢見ず、一歩さがってみると相手のことも、自分のことも、姉ちゃん、あんた一人苦労したみたいに思っているけど、そうじゃない。

相手があつたからこそ、それでいいじゃない。

久しぶりに姉妹手を取り会って話したこと、「頑張って」という言葉より大切なものは、誰もが一人ではないということよ。

映画「くじけないで」を観て

柴田トヨさんの半生を描いた映画「くじけないで」、映画館に足を運び一人でじっくり、いろんな思いを描きながら観て、心に残った言葉「おばちゃんでない。「柴田トヨです」とはつきり名言を残されたこと。

その精神に敬服し、90歳を過ぎてから、息子さんに勧められて詩をつくるのが生き甲斐になったとのこと。

戦前、戦中、戦後、子どもの頃つらい経験をし、それがいつしか血となり肉となって詩心を起こしたのでろうか。トヨさんの素晴らしい人生、親子の絆など心をゆさぶるものを覚えた。

誰しも高齢になると弱気になり、「もうダメだ、これも出来ない、考えられない。人生終わりか、と自分の心にク

イを打つ時がある。でもトヨさんのように「朝は必ずやって来る」まだまだ元氣を出して希望を持って生きたい。



俳句

土田 裕

熱爛やまたも講釈長き人 転職は難し湯豆腐ふつふつと 目つぶり無念無想の日向ぼこ 短日や楠の大樹は瘤重ね 親と子で聖樹飾りし日の遠く

編集後記

いよいよ今年も商売人が苦勞する節季（せつき）の師走です。無い金のやり繰りを考えて年の瀬を越えなければなりません。私は能天気にも「心の出納帳」を考えています。金銭の損得を棚上げして、今年一年の嬉しい事、悲しいかった事を思いのまま左右に書き上げて、その度合いを数字で書きましました。すると今年は楽しい年だったと分かりました。

◆テレビ放映のお知らせ

朝日放送の「せのぶら」の取材があり数分間ですが放映されます。日時、12月10日。10時54分よりしければご覧になってください。

梵店主

よつちゃんのところはゆれていた。頭の中に大きな空洞ができたかのように、考えることが怖くなっていったのだ。考えれば考えるほど深い底なしの闇に落ちていくように思えたのである。医師の言葉をかりれば薬が効くか効かないかは五分五分、病の解明は一割ぐらいしか進んでいない、という。

そんな底なし沼に迷い込んだよつちゃんであったが、救いをみつけのた。それは「芥川だより」に書き続けてきた「爺捨て山」であった。自分は奥深い山の中でひとりもがいて死にたい。死に至るドラマを堪能したい、と書いていた事が、よつちゃんに冷静さを取り戻させたのだ。

「そうだ、この病の苦しみは爺捨て山に行くための準備であり訓練なのだ。この程度のことで恐れていたのでは話にならない」爺捨て山には何も無い。よつちゃんが今いる病院には24時間、食事から治療まですべて看護されている。まさに天国なのだ。そんな恵まれた環境にあつて文句をいうぐらいなら、とうてい爺捨て山には行けない。

冬山の剣岳で疲労して歩けなくなった時に気づいた方法である。自分とは別の自分を想像してもう一人のよつちゃんから自分を見るのである。第二のよつちゃん

は、あの時「なあーんだ。えらそうなことばかり言っているくせにこのざまか、なさないか。おまえもがんばれ」と言った。よつちゃんは、第二のよつちゃんが言っている瞬間は確かに苦しみを忘れていたと考えるのだ。一瞬であっても確かに消えていたのではないか。そうだ、入院中はこの方法でいこうとよつちゃんは心に決めた。

しかし、そう簡単に苦しみからは逃れられない。第二のよつちゃんとよつちゃんを行きつ戻りつところはゆれるのであった。さらに「爺捨て山」はよつちゃんを悩ます。これまで書いてきた文がよつちゃんを縛るのである。「お前が書いてきたことはウソなのか。65歳でのたれ死を夢見てきたのは、絵空事だったのか」ときいてくる。

「いや、ウソじゃない。本心を書いたままで。今もその気持ちは変わっていない」と「それなら、なにも苦しむことはないじゃないか。おまえの希望通りにすすんでいるのに」「それはそうなのだが、いや、そうなんだよな。おれの想い過ぎしなんだよな。すべてはおれの想うようになってきているのだ。喜ばなくてはならないのに、悲嘆するとは情けない」「少しはわかったか、冷静になったようだね。

なにも心配をすることは無い。おまえの想ったようになるから」

よつちゃんはそのころに聖書を読むこととしていた。そんな時に聖書を読むことよつて心の中を鎮めたい、爺捨て山に書いた自分になりきりたい。さまざまのころを落ち着かせたい。そんな気持ちで読み始めたのであった。

以前、親しい尼さんの影響で法華経を読み、講釈を受けていたから、宗教のなるとるかを少しは理解しているつもりだった。宗教とは、つまるところ、信じきるか否かの問題であつて、悟りも日々新たに悟り続ける苦行を要する終りのない厳しい境地に耐えねばならない。宗教の原点は心の革命思想であると理解していた。

しかし、よつちゃんは、これまで信じ切ることが出来なかった。だから宗教の入り口にも立てなかつたのである。そんなあやふやなよつちゃんではあつたが、旧約聖書を読みかけて、すぐに法華経とよく似ているなあ、と感じ始めた。

旧約聖書の始めに書かれた創世記から出エジプト記を読みながら、よつちゃんは主なる神の横暴な独裁性と恐怖をまき散らすカリスマ的な力などずいぶん矛盾した行為の数々に驚いた。しかし、よつちゃんは、一見矛盾した見方が書かれ

た文を読みながら、主なる神に対して親近感を覚えたのである。人なんて神から見たらたいしたことないじゃないか。預言者であつても神の前では単なるしもべに過ぎない。神の怒りをおつたら追放

に足らない虫けらのようなものだ。これまで自分は意識過剰に自分の命を考えてきたが、よく考えれば蚊のようなものなのだ。腕にとまった蚊を、ぴしゃつとたたいて殺しても、「ざまあみろ、おれの血を吸いやがって、これで清々したわ」とよろこぶ程度で蚊の命のなんたるかを考える人はいない。

蚊と同じように考えれば、人の命などは気にかけるまでもないことになる。単純なよつちゃんは、この考え方で自分の病や死を取るに足らない小さなことだと考えるようになった。

不治の病から死に至るのではないかと不安が大きくなっていったのだが、風船が萎んでいくように小さくなったのである。よつちゃんの独断と偏見にみちた解釈によれば、神であつても間違いはするし、矛盾に満ちた気ままな行為をするのだ。まして普通の人間であるよつちゃんが迷い途方にくれるのは当たり前なのだ。「そうーなあんだ」悩むだけバカバカしい。自分の命は蚊以上でも以下でもない。死ぬときはあつ、と言う間に亡くなるのだ。

詐欺師のオカダくんとAOの事件簿

拝啓、「芥川だより」読者の皆さま。

AOと申します。イニシャルです。「アホのおぼはん」の略だと思っただけでも間違いではありません。で、どれぐらいアホかという、覚えていないことだけ書いても新聞の朝刊三日分ぐらいの文字の量になるので省きますが、それでは「アホさ」加減がわからないので、一つだけ。前号でさらっと書いたのですが、家賃の「振り込まない詐欺」事件。一回ぐらい家賃を払い損ねたことを事件呼ばわりするほど、几帳面でもなければ神経質でもないんですけど、管理会社から督促状が届いたとき、私はむちゃくちゃドキドキし、興奮すらしめた、そのところがアホだったという話です。

「来たーっ」と私は思ったのです。何がつて「振り込め詐欺」。自分は家賃を払っていると思込んでいたわけですから、もう完全に犯罪に巻き込まれた、と信じて疑わない。その瞬間、頭の中に犯罪の構図が浮かび上がりました。犯人は、管理会社を辞めたヤツ（督促状に岡田某と名乗ってました）。だから、うちの住所もわかるし、金額も正確、用紙も同じ。「こ、これ（督促状）

を警察に持って行かな。しかし、あるんやな、こんな犯罪が」。こんなというのは家賃の二重どり詐欺。正直に言いますね。かなり、ドキドキ。嬉しくて、ではなく怖くて。犯罪者に正義の鉄槌を下さなければならぬと思えば、そりやドキドキします。でも、私の辞書に「無視、黙殺」の項目はありません。「捕まえたる」正確には「警察に捕まえたる」ですが、そのためにどうすればいいか、怯えながら（ほんの少し、事件に遭遇してもたよ、この私が！と高揚したのも事実です）考えました。「まず、私が家賃を払った証拠がある」。幸い、銀行振り込みです。動かぬ証拠がある。レシートをしっかりと保管するなんて高度な整理整頓能力はなくても、通帳までは捨てない、いくら私でも。通帳も警察に持って行く。

しかし、待てよ！とこのとき初めて自分の方に落ち度がある可能性が閃いたので。管理会社が途中で変わって、銀行の振込先が変わったのに、登録番号を抹消していなかった。指定された銀行が同じだったので、前の管理会社が「1」、新しい方が「2」。当然、「2」に振り込んだつもりだったけど、もしかしたらクセが出て「1」を押してしまったかも。

「キヤー」と思いました。「返してくれ

るんやろうか」。今になったら、家賃の一カ月分ぐらいのことで、それほどどうもたえなくてもよかったのではないかと、思うけれど、最初は「すわ、犯罪！」と思ひ、次に「げつ、間違ったかも！」と思ひ、AOさんは本当にAO（アホなおぼはん）でした。

間違ったかもと思いついた瞬間、「振り込め詐欺」の方はかき消え、「いやん、返してもらえない？ こういうとき、どう言えば穏便に返金を要求できるんだらうか」という心配の方に気持ちはグイグイ傾いていきました。ここで、また通帳です。「通帳を、前の管理会社に持っていけば間違つて振り込んだ証拠になる。

あ！でも、あの会社、倒産して、もうないかもいれへん。じゃ、だれが私の家賃をポツポにナイナイしたわけ？「ポツポナイナイも犯罪ではないか、私が間違つたとしても、「振り込みがありましたけど、うちでは請求しておりません」と返してくるのが、真つ当な市民ではないか。

どっちにしても通帳だ、と私は室内某所に隠してある通帳を取り出した。

「間違つて振り込んだ」という線で気持ち固まっているので、そこを確認しなければ、と思つて探したけれど、ちゃんと、現在の管理会社の名前がカタカナで刻印されている。八月も九月も十月も、「えつ、間違つてないやん」。しかも八、

九、十月、やっぱり払ってるやん！しかし、ふと日付に目があった。八月二日。これは七月末までに払うべきところをうっかりして、月が変わつて慌てて払ったんだ。次に振り込んだのが九月二十七日。これは十月分。その次が十月三十日。いうまでもなく十一月分。つてことは、「払ってないやん！ 九月分」。

詐欺も振込先間違いも何もなかったのです。単に一カ月分を払い忘れていて、その認識すらしていなかっただけ。ああ、なんとAOっぷり。疲れた。読んでくれた皆さんもお疲れだと思ひます。自分のことながら、オツチヨコチヨイは本当に疲れます。

しかも、です。管理会社は督促状の前にちゃんと「前月のお振り込みがなかったの」と十月に送ってきた請求書に九月の分も入れてきていたんです。それを見てなかった不覚！。金額は毎月同じなので、通知を郵便受けから持つてきてもそこらへんにポイと投げ出してしまふ。投げ出しているだけだから何かの拍子で開く。机の上を掃除したときとか。そしたら請求書が二枚。これが届いた日に見てさえいたら、何の罪もない岡田某を新車の振り込め詐欺師かと疑わずに済んだのです。ごめん、オカダくん。（AO）



今年の漢字

大江雉兎

十二月になると世間の話題を集めるのが「今年の××」だろう。重大なのが十大なのははまだ区別できないが、大事件をリストアップするのはお約束であり、米国タイム誌の「パーソン・オブ・ザ・イヤー」だのユーキャンの「流行語大賞」だのいろいろなものがある。十二月月上旬、京都は清水寺の舞台で発表される「今年の漢字」も、それらのラインナップに加わる一つである。

さて「今年の漢字」に触れると、次はどうしようか、やや思案してしまふ。純真素朴に、一年の世相を反映する漢字が云々と、イベントの説明をするべきか、それとも主催者である日本漢字能力検定協会のドタバタ劇を紹介するべきか。前者だけなら淡泊すぎるが、かといって後者の方に重点をおくと生々しすぎて手におえない。利権なのか権力闘争なのか知らないが、ネット検索をかけるだけで出てくるのはお偉方たちの泥仕合、金と名声が絡んでの胡散臭さでんこ盛りである。ブナの森での倨居に憧れる者としては見なかったことしておきたい類の話である。それでも「今年の漢字」に何が選ばれるのかという話題は、非常に興味がある。

そえられる。「金」が選ばれた昨年は、選ばれた字以上に、それが二度目の選出であったことに話題が集まった。そんなあたりも気を留めながら一年を振り返ってみると、今年も二度目云々が言われそうな漢字が有力になりつつある。十月ごろから立て続けに報道されるメニュー虚偽表示の問題に絡んでの「偽」である。

初めて「偽」が選ばれた二〇〇七年は、まさに食品偽装が続けざまに明らかになった年だった。そこだけを取り上げると、今年とは状況的には重なっているようだ。だが少し立ち止まってみるとどうだろう。本当に類似の状況がくり返されているのかどうか。というの、発端となった芝エビ問題は業界内では半ば常識化していたというし、世間の声にも「過剰反応じゃない？」というものが少なからず混じるからである。確かに某喫茶チェーンが「バタートーストと表示しておきながらマーガリンを使っていました」と言った時には、ツイッターには失笑に近い書き込みが目立った。街の喫茶店がマーガリンを使ってバタートーストを提供するのは暗黙の了解だろうという笑いである。あるいは、高級と思われるていたホテル系列が相次いで告知をしたものだから、その喫茶チェーンは「マーガリントースト」を謝罪することで

自らの格をアピールしたかったのではないかとの天邪鬼的な見方さえ招いてしまったのである。

要するに二〇〇七年と今年の偽装を比べるなら、賞味期限や産地を意図的に偽ったことで企業犯罪的な側面が濃くなった前者に比べ、後者は業界の常識が消費者目線では偽りとなりかねないにも関わらず常態化していたことへの呆れの声が目立つのである。そうした意味では、似て非なる状況になるわけだが、「偽」という漢字に絡めるのであれば、今年の事情については偽装表示とは別の「偽」がないわけではない。

とあるネットメディアが報じたところによれば、阪急阪神ホテルズに始まる一連の動きは、実は秋口になってからのものではなく、五月に千葉県にある某ネズミの国がレストランの虚偽表示を謝罪したのが発端だったという。そのネットメディアはさらに続ける。デイズニールランドの謝罪はテレビも新聞もほとんど取り上げなかったにもかかわらず、阪急阪神ホテルズの時には大々的に報じて袋だたき状態にしてしまふ、その背景にはデイズニールランドへの批判をタブー視するマスコミの体質があると。仮にネットメディアが伝えたところが真実だとすれば、阪急阪神ホテルズはじめ、秋以降に謝罪会見を行ったホテルおよび系列企業を弾劾

するのは、消費者の立場を装う見せかけであり、実は直接的な利害関係に縛られた偽善的な報道ということになってしまふ。

結局のところ、「今年の漢字」に再選出されるかも知れない「偽」、それはホテル・レストラン業界における一連の偽装表示の「偽」であると同時に、マスコミ業界に蔓延る偽善の「偽」でもある。折しも、特定秘密保護法案が議論され、マスコミ側は「国民の知る権利」を盾に批判を強めている。しかし、その裏側で「報道しない自由」が践み行われているのであれば、勇ましい彼らの論陣はにわかには色褪せたものにならざるを得ない。

参考:「デイズニールランド食品偽装はなぜ批判されない? 巧妙手法とマスコミタブー、デイズニール信仰」ビジネスジャーナル 二〇一三年十一月二十日
http://biz-journal.jp/2013/11/post_3384.html



野菜作りは最高の贅沢

駒田明克

小生、血液型がB型のせいかな、昔から好奇心が旺盛なほうで、何でも興味を持ち、色んなことにトライしては失敗し、あるときは挫折感を味わってまいりました。それというのも、仕事をしていた折は時間的な制約があり、ほとんどの取り組みが中途半端に終わってしまったからと思っています。

仕事の制約から解放され、24時間自分の時間という有難い環境にある今、逆にやりたいことが多くあり過ぎ、肝心の時間が足りません。むろんお金も要りません。：がありません。

以前、小生の趣味の数々を少しだけ紹介させていただきましたが、昨日新たに「ジャズを歌おう」という講座と「クラシックギターのレッスン」の講座があることを知り、中日文化センター津教室に申し込んできました。

この「ジャズを歌おう」の講座は大変人気のある講座で、15名の定員が満杯で退会者待ちという状態で、いつ実現するか分かりません。近く実現することを信じたいと思って居ります。

「クラシックギター」のほうは新規講座で、最小定員が5名ということで、目下応募者は3名、小生が加わって4名、3月中にあと1名参加者が

見つからないと開講できないそうです。これも近く実現してほしいと念じております。

これが実現すると、今楽しんでいる野菜作り、山野草栽培、生け花、ゴルフ、音楽鑑賞、水彩画、アコースティックギター、キーボード、陶芸、囲碁との時間配分が大変です。

この中でも一番時間を取るの野菜作りです。

約一反の畑を車で10分程のところ借りており、ここでブルーベリー30本、その他に季節毎に、色々な野菜を栽培しております。

今、冬場ですので一番野菜の少ない時ですが、それでも畑にはキャベツ、ブロッコリー、スナップエンドウ、なばな、ニンニク、タマネギ、ジャガイモ、が植えてあります。

4月になると、いよいよ夏野菜の季節です。トマト、ミニトマト、キュウリ、ナス、ピーマン、おくら、ネギ、スイカ、カボチャ、トモロコシ等、早く4月にならないかと子供のよう中心待ちしております。

よく人から、そんなに作ってなんとするのと聞かれます。しかしながら市内に何人かの友人がおります。彼ら、彼女らが貰ってくれます。

野菜作りのノーハウにつきましては、以前、津インター近くにあるJ A

津安芸で、ふれあい農業塾の塾生を募集しており、塾生になることが出来、一年間みっちり野菜栽培の基本的な事項、土壌のこと、肥料のこと、農薬のこと等、講義と実習(約15平方メートルの土地を与えられる)を受けました。

こうした農業の基本を身に着けたうえで、生来の好奇心から、永田農法やトマトのハイポニカ栽培も勉強しながら、失敗も経験のうちと考え前向きに取り組んでおります。

野菜栽培にあたって、一番注意しなければならぬことは、連作障害、虫害、病気です。

連作障害については、毎年作付計画を立てるにあたって、畑の各畝の栽培履歴を平面図に記し、作付ローテーションにより連作障害を極力少なくなるようにしているものの、わずかに一反の畑に欲深く多くの野菜を植え付ける計画を立てるので、パズルの当てはめも、につきも、さつちも行かない場合が生じます。

こういう場合は、特に連作障害の影響がきついトマト、ナス、スイカ等は接ぎ木苗を購入して対処しております。この場合、苗代が相当高くなります。

次に、葉害ですが、特に秋にキャベツ、ハクサイ、ブロッコリー、などは

青虫、夜盗虫の格好のターゲットですので、苗を植えると同時に畝全体をネットで覆い防ぎます。一切農薬は使いません。病気に關しては、連作を避ければある程度防げます。

駒田農園では、珍しい野菜を栽培したいとの思いからカタログ等で変わった野菜の種や苗を取り寄せ楽しんでおります。例えば、ミニトマトのピッコラージュ、ユ、飛驒かぼちゃ等、スーパーで売ってないものが作れます。

昨年は、小生の不覚で落花生の栽培に失敗してしまいました。原因が分からぬため、落花生栽培の専門書を読み、やっと原因がわかりました。何事も自己流は怪我の元ですね。小生のゴルフのことかな？

アマチュアの農業は採算性を考えると絶対割に合いません。しかしながら、小生の場合、畑で汗をかく心地よさ、収穫時になると朝採りしたトマト、キュウリ、トモロコシのあの美味しさ、収穫した野菜のずっしり重い感触。

何ものにも変え難い喜びが味わえます。小生に取りましては、これが最高の贅沢と

思っています。



小さくて大いなるもの—水は地球を救う

坂本一光

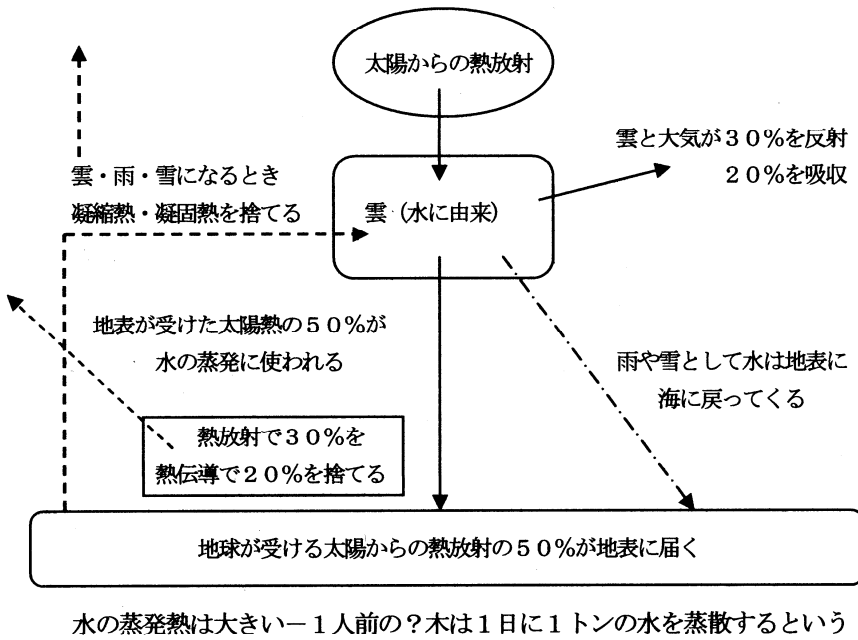
太陽は、地球の生命が生きるためのエネルギー（光と熱）の源泉である。水は生命に不可欠である。しかしそれだけでは宇宙へ返し地球を守る。地球を救うのは水である。愛ではない。

どういうことか、図1を見て考えてみよう。

太陽は一人ぼっちでも偉大であり、自ら燃えながら途方もなく膨大なエネルギーを宇宙に放射している。地球が受けとるのは、太陽の全放射エネルギーの22億分の1である。その値は、大気圏外では1平方メートルあたり1360ワットである。1メートル四方に100ワットの電球を13から14個置いてみると想像してみよう。

○穏やかな地球環境を維持する水の役割—地球の平均気温14℃
○熱しにくく、冷めにくい水（水分子間の水素結合の強さ）
○地表の70%は海—海は巨大で安定した熱源

太陽からの熱放射—地球はその22億分の1を受ける
その値は大気圏外で1平方メートルあたり1360ワット



水の蒸発熱は大きい—1人前の？木は1日に1トンの水を蒸散するという

図1 「水は地球を救う」之図

そのうち地表まで達するエネルギーはおよそ半分である。それでも1平方メートルあたり500ワット以上だ。この夏は異常な暑さであったが、日陰で測る気温が35℃でも、よく晴れた日向なら、冬でもないのにさらにそれだけのヒーターであぶられていることになる。冬の日向ぼっこが気持ちいいのはありがたいが、夏はやめてくれ！と叫びたくもなる。それはさておき、地球が太陽からの熱をもらってばかりいたらどうなるか。地球は熱地獄になるだろう。受けたものは返す、それが自然の掟というか、返すことで地球は一定温度（地球の目でみた平均気温）の熱平衡を保つことができる。地表が受けた太陽熱の半分は、地表での水の蒸発に使われる。水の蒸発熱は、水に類似した物質や同様の小さな粒子からなる分子性物質に比べて、ずいぶん大きい。水分子間の結びつき（それを水素結合という）は次話以降で述べる）が小さな分子であるにもかかわらず異常に強いのである。水の蒸発で地表の温度は太陽であたたまった分の半分だけ元に戻る。エネルギーをもらった水は水蒸気となり大気圏上空へと上がる。そこで冷やされると、水蒸気は雲になる。その時、水蒸気は蒸発時にもらったのと同じ量の熱を捨て水になる。みぞれや雪の水になれば、さらに凝固熱を捨てる。こうして水はエネルギーを上空に運び、さらに賢いことに雨や雪として再び地表に戻ってくる。地球の水は糸の切れた凧ではなく、エネルギーを運ぶブーメランである。あなかしこ、あなかしこ。水の蒸発のほかには地表から熱が捨てられる別の仕組みもある。晴れた夜明けに放射冷却があるように地表からその温度に応じて熱が放射される熱放射と、地表から大気に熱が伝わる熱伝導である。これらを合わせた効果は、水の蒸発の効果に匹敵する。以上が、「水は地球を救う」おおざっぱな話である。

ところで、太陽エネルギーは何から生み出されているか。太陽の内部で水素の原子核同士が融合してヘリウムの原子核になる核融合反応がその源である。現在この反応を人類（この言い方は必ずしも適当でないが）が起こすことができるのは、原子爆弾を起爆剤とする水素爆弾によってのみである。もちろん起こすべきではなく、持つべきでない（開発すべきでもなかった）代物である。それは原子爆弾も、原子力発電もまた、今日では同様である。原子爆弾にはウラン235の原子核の核分裂反応を利用する広島型のもと、プルトニウム239のそれを使う長崎型のものがある。核分裂反応（放射性元素の崩壊または壊変という）は、大きな放射性元素の原子核である。逆に核融合反応は小さな原子の原子核が集合し1つに融合して大きな別の

その大きさにふさわしいあたりまえの普通の分子の集合体であつたとすれば、水はおよそマイナス120℃で凍り、マイナス80℃で沸騰するような物質であるだろう（この推定については次回に述べる）。池や川や海の氷が底に沈んでやがて全面凍結し生命はどうなるかなどを心配する前に、地球が太陽から受ける熱放射エネルギーの大きさ（それは、地球・太陽間の距離と地球の大きさで決まる）から考えて、地球上に氷はおろか液体の水も存在しないだろう。表面温度400℃という金星ほどではないにしても、地球は熱い高圧の大気（水は存在しても水蒸気、液体の水（海）がないから原始大気に大量に存在した二酸化炭素は溶ける場所がなく、大気を中心は二酸化炭素か）に包まれた、生命なき惑星であるだろう。その風景を誰もみることはできないが。

地上の風景は、生命活動で作られたものを含め、水が作りだした風景である。水だけで作られたのではないのは明らかであるが、水なしに現出しなかった風景であることもまた明らかである。水を見るときに思う。季節みな美しい国よ「花も実もある 根も葉もない」国への道を行くな、と。

宿題2…われわれの生命維持に必要な物質のなかで生物に由来しないものがあるか。あるとすれば何か。

答…広く食物でいえば、水と塩化ナトリウム（食塩）だけ、と言ってよいだろう。

必要な多くの微量元素も食物（生物）を通して摂取される。呼吸に必要な酸素は大気中におよそ20%存在するが、これは水と二酸化炭素と太陽エネルギーを利用して植物が光合成で生成したものである。酸素は他の元素と強く反応する性質があり、地球誕生時にはすべて、金属であれ非金属であれ、他の元素と結合していたと考えられる。水もその一例。

最後に、例によって今回も宿題を課す。

宿題1…先に示した図で、地球は太陽の全放射エネルギーの22億分の1を受けていると言った。どうしてそうなるかを示せ。地球と太陽の距離は1億5千万キロメートル、地球は半径6500キロメートルの球とする。

宿題2…最近、「これまでに経験したことのないような大雨」があらちち降る。しかも範囲が極めて限定された局地的豪雨でどこに降ってもおかしくないと考えるのは、どこに起きてもおかしくないと考えてしまう地震と同じである。さて、一時間雨量が100ミリメートルであるとは、畳一枚（簡単のため畳を90センチメートル×2メートルとしておく）に一時間で一升瓶に入った水を何本分だけふりかけたことに相当するか。（自然はまちがわかない、まちがうのは人間である・大分の素老人）

降る。しかも範囲が極めて限定された局地的豪雨でどこに降ってもおかしくないと考えるのは、どこに起きてもおかしくないと考えてしまう地震と同じである。さて、一時間雨量が100ミリメートルであるとは、畳一枚（簡単のため畳を90センチメートル×2メートルとしておく）に一時間で一升瓶に入った水を何本分だけふりかけたことに相当するか。（自然はまちがわかない、まちがうのは人間である・大分の素老人）

競争からの卒業

伊藤 明

◆前回は人間、一生「発達」を続けるものだ、ということを書きました。

こう書くと、人間、年齢をとると体力は衰えるのに、何で「発達」すると言えるのかと、疑問に思う方が目に見えるようです。実際に体力的には年齢をとれば衰えてくることは明らかです。しかしこれとは逆に、若さの賛美はよく目にします。最近では以前よりましになつていますが、「若さ」信仰といえるようなものが、まだ日本の社会を支配しているのだらうと思います。テレビや雑誌などでは、若さを誇るメッセー

ジに溢れていました（これは裏返せば年齢をとることに対するヘイト・メッセーということになります）。

◆実は「うつ」の患者さんと話をすると、必ずといっていいほど「若いときのようにできなくなつてしまった、私はもうだめだ」「昔のようにできなければ、もう死んだ方がましだ」といった言葉を聞くからです。これは判で押したようにみなさん同じなのです。中高年のうつの方（「うつ」が出てくるのは中高年が多いのですが）は、自分がかなくなつたこと、失つたもの、若さや体力的な力、そしてときに美貌など

の喪失を惜しんだり後悔したりするものです。

◆年齢を重ねると、人はいろいろなものを喪失してくるもの。これはある程度しかたのないことです。体力的・健康上の問題は「人間」という動物種である以上、避けられないものといえるでしょう。しかし体力以外の面、例えば職人の世界や技芸の世界の技術などは、修練やトレーニングを積むことで、技術的に若者に負けない技術を得ることも衆知の事実です。これは実にさまざまな分野にわたつています。「成熟」とか「円熟」とか言われるものはそうした事情を指すものでしょう。ある一つの分野を熟知するには長い年月に渡る修練の積みかねが必要になることが多いのです。職人の世界や芸術の世界がその代表と思いますが、実は「人生」あるいは「生活」そのものにも、ある種の修練が必要であり、そういう「人生」や「生活」についての豊富な経験や知恵を身につけることが心豊かな人生を送るためには必要なことになるのです。こういった事情は人間がその年代の段階ごとに独自の特性をもっていることを示しています。中年以降の年代の特性は、体力が衰えるけれど、豊富な経験に基づく人生の知恵、ひと味違った奥深い精神性、人間性に対する洞察に基づいた人生観、借りものでない世界観、というようにも表現できるでしょうか。ここでは柔軟で

融通無碍な思考も大切になることでしょう。

◆それに対して、若さというものは、経験の少なさゆえの怖いもの知らずと、体力をたのんで突き進むといった際だった特性があげられます。「白か黒か」の二分法的・原理主義的・非妥協的な思考とも言えるでしょうか。いみじくもこういった事情を私の大学時代の先生は「若者は頭が固い」と表現をされていました。とくに若者の行動は往々にして他者との「競争とそれに打ち勝つ」こと、さらにその極端な表現として「パーフェクトを目指す」ということに還元されることが多いものです。

で、真央ちゃんも一時のスランプを克服して成長したんだな、と感じたことでした。

◆学校の体育教育にとって圧倒的に重要なのは、少数のプロスポーツ選手を育てることにあるのでなく、すべての生徒がスポーツを少なくとも嫌いにさせず、一生に渡って日常生活に運動を取り入れて健康な一生を獲得するのを可能にすることに思われます。しかしこれに反して現実がそうなっていると

◆学校の体育教育にとつて圧倒的に重要なのは、少数のプロスポーツ選手を育てることにあるのでなく、すべての生徒がスポーツを少なくとも嫌いにさせず、一生に渡って日常生活に運動を取り入れて健康な一生を獲得するのを可能にすることに思われます。しかしこれに反して現実がそうなっていると

◆このような傾向は、日本の社会や教育システムの中にこの価値観が根付いてしまっており、それによって支配されて多くの人がそれについて自覚をしなくなっているという現実があるように私は思います。受験に向けた学校と家庭での勉強、課外のスポーツなどにしてもしかり。これとつけ必ず勝負・順位・順序・番付・序列をつけるということが染みこんでいる。例えばオリンピックが最たるものです。フィギュアスケートの浅田真央選手のかつての口癖は「パーフェクト」でした(私はこの子はこれほどパーフェクトをめざして、この先どうなってしまうのだろうか、私は密かに心配をしていたのですが、今シーズンでのインタビューでは「パーフェクト」の単語は出てこないの

◆他人と競争をするためには何らかの「数値化」が必要です。フィギュアスケートは無論得点で表現されるし、そもそも日本人の大好きなオリンピックでは、すべてが数値化をされて序列を競うという構造になっています。これを頂点にして日本のほとんどすべてのスポーツが序列を競い「一番をめざす」といういわば「幻想」に縛られています。「一番でなければならぬの？」という有名な疑問にあつたとおり、科学の分野も「一番を競う」というゲーム」になっているのです。

◆学校の体育教育にとつて圧倒的に重要なのは、少数のプロスポーツ選手を育てることにあるのでなく、すべての生徒がスポーツを少なくとも嫌いにさせず、一生に渡って日常生活に運動を取り入れて健康な一生を獲得するのを可能にすることに思われます。しかしこれに反して現実がそうなっていると

し続けるときに、多くの人が「うつ」などの障害に陥りやすいと言えます。人生後半にさしかかって尚「競争」の意識、あるいは無意識に振り回されるとき、人はさまざまなストレスに対する抵抗力が低下するのだと考えられます。しかし日本の社会でのこれまでの教育やしつけの中で、無自覚になるまで各人に身に染みこまされた「競争」への志向は、服を脱ぐようにには容易に脱ぎ去ることができないことが多いのです。まず自分が今、誰かと「競争」していないかとチェックし自覚することが第一歩になるでしょう。「競争」からの卒業の先に、一部の失うことを現実として受け容れてはじめて、心ゆたかで成熟した、その年代にふさわしい発達の世界があるように思うのです。

「青春の蹉跌」

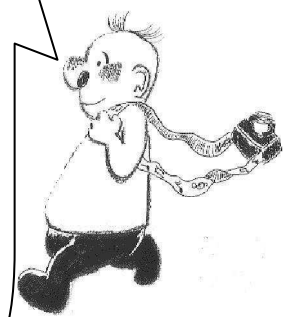
成瀬和之

私は大阪の公立高校に入学した。中学のクラスで1・2番の成績の生徒を集める「進学校」であつた。高校3年になって、古典で習った伊勢物語の中の、男が「身を要なき者に思ひなして」という箇所がやけに胸に響いてきた。3年生の6月のことであつた。梅雨のうっとうしい季節、いつものように制服を着て、家を出た。鞆には、教科書・

ノートの替わりに、書きためた日記帳を詰め込み、学校へ向かわず、山陰線に乗った。日記帳を全て捨て、島根県の境港で降り、フェリーで隠岐の島へ渡った。そして、死のうとして、朝鮮半島へ向けて日本海に泳ぎだした。なぜ自殺しようとしたのか、ふり返ってみる。1年生の最初の頃、ホームルームでプリントが配られた。3年間ラグビー部で活躍し、見事現役で東大に合格した先輩の体験談であった。「勉強とクラブの両立」を果たす「黒い秀才」が理想の高校生像として示されたのだろう。単純な私は、自分の「運動オンチ」をかえりみず、勉強と部活動の両立をめざし、ラグビー部に入部した。その年、ラグビー部は、花園ラグビー場で行われる全国大会に出場し1回戦で東京の強豪目黒高校と対戦し、惜しくも敗れた。私は1年生であったから、先輩のスクラムの相手をしたり、水やレモンの世話をしたりしていただけである。そのような強いチームと私の運動能力とのギャップは大きかった。その上、足の怪我をし、悶々と見学する日々を過ごした。

うな衝撃を受けた。そのような成績への「免疫」がなかったのである。2年生になるときにラグビー部を退部し、勉強に専念しようとしたが、成績がそう簡単に上がるものではないことは御承知のとおりである。クラブと勉強に挫折し、自分の存在価値を否定されたように感じ、「身を要なき者に思ひなして」自殺未遂に至ったのだろう。「井の中の蛙大海を知らず」だと気づいたのは大人になってからである。ところで、日本海に泳ぎだしてどうなったのか。服のまま海に飛び込み、身体が重くなり、疲れ果てた。海水を飲み込み、「あつぷあつぷ」し、息が苦しい。そのとき、たまたま通りかかった漁船が、かすかに目に入った。「助けてえ〜」、意図しないのに口が、身体が勝手に叫んでいた。私は漁船に救助された。次の週からまた学校へ行きだした。担任の先生は何事もなかったかのように、そつと受け入れてくれた。社会に出て、高校教師を約40年生徒たちとともに、苦しいこともあったが、お陰様で、充実した人生を送らせてもらえた。還暦を過ぎて、今でもあの若き日の6月の日本海を鮮明に思い出す。あのとき偶然にも通りかかった漁船のことを・・・奇跡ともいえる。

道の道とす可きは常の道に非ず。名も名とす可きは常の名に非ず。名きは天地の始め……



「道」ってなんやねん？①

十月のある日、「芥川の写真屋さん」に立ち寄ると、店主のコーちゃんが奥の部屋から一冊の本をもってきて、教えてほしいことがあるからこの部分を読めという。それは、講談社版（たぶん）『中国の歴史』第一巻、「戦国時代の思想」という章に記された老子の形而上学についてだった。「老荘思想の根本概念である道とはなんぞや」これがコーちゃんの問いである。『中国の歴史』は「道とは、人が歩くのによらなければならぬ道であり、それはまた原理である」が、「道という原理は一定不変ではない」という。また「道は名であり、ことばである」と述べているが、「道は名以前の根源的なもの」ともいう。よくわからない。名（ことば）が発生する以前、すなわち天地がはじめて生成したとき「混沌として差別がつけられない世界」だった。その無名だった世界に、名が生まれ、差別ができ、有と無の対立が生

まれた。老子はその有と無を根源的には同一と考え、さらに永久不変な存在、絶対的な存在を否定して、「たえず変わって、存在しないように見えながら、しかも存在しないことによつて存在するもの、それが道である」と説いている。けつきよく道とはどういう概念なのかつかめない。つかもうと考えること自体がまちがっているのかもしれない。老荘の学派を道家といい、老子を人格化し古い信仰などを採り入れて二世紀頃に成立した宗教を道教というように、道は老荘思想の中核である。「道ってなんやねん」という問いを発した時点でコーちゃんは、老荘の世界の入り口に立っている。道という根本概念の理解を深めるために一歩踏み込んでみてはどうだろうか。不肖山猿もこれを機に老荘の世界にわけいってみようと思う。そのためには導き手が必要である。老荘の大家といえば福永光司先生の名が浮かぶ。二十年以上前に福永先生の講義を聴いたことがある。エネルギーシユな講義で、柔道で鍛えたがっしりした体軀から、老荘思想のエッセンスがあふれ出てくるように思えた。その福永先生の「老荘思想と現代」というレポートをテキストにしよう、少し古いが。（猿）